

Fate/Grand Order ～  
絵本と童話作家～

十握剣

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

世界的有名な童話作家、アンデルセンと。

絵本で夢見た子供たちの英雄となったナーサリー・ライム。

英霊となったことで交えられたことで、話すことができるようになったこの二人は、ナーサリーの無茶振りを受けるアンデルセンとの遊びのお話。

# 目次

絵本と童話作家

1

まずは手始めに

7



# 絵本と童話作家

それはとても簡単にして簡潔な言葉だった。

「つまらないのだわ」

純真にしてまっすぐな瞳が、メガネを掛けて忙しそうに執筆している青髪の小さな少年に向けながらそんなことを言ってきた。

少年の張りある白い肌で、もしそこにシヨタコンらしき性癖持ちがいたら間違いないとお持ち帰りされてもおかしくない美少年が、なんとも少年とは思えない仕事を終えた中年オヤジが疲労で倒れそうな顔に変質し、その純粋を超えた煩わしい問いに反応する。

「問い、ともなんとも言えない発言だどうも。活字の使い過ぎでお前の言葉から字ばかり連想させられる。オイ今すぐやめろ。大人しく本棚にでも入っている」

「ひどいのだわ、ひどいのだわ！ だったらまた『人魚姫』について言いたいことがたつつかくさんあるのだけれど、言ってもいいのかしら？」

なんとも渋すぎる声で返ってきたというのに、純真な少女はそれを特に気にすることも無く話を続ける。

「……シエイクスピアを呼ぶぞ？」

「やめてほしいのだから！ あの難しいお話しか書かないおじさん呼ばないでほしいのだから！ もう歯医者にはいかない様に歯磨きしてるもん！ ……もう、どうしてアンデルセンはあのおじさんと仲良しなのか分からないわ」

「仲が良いだと？ ハッ！ お前の目は見た目通りのものだな。鏡みたいは何も見えていない。あれはそうだな。同じ苦しみを噛み締めた同業者か？ いや、俺の方が苦しんだ、俺の方が凄いな」

「もう、あたしに分かるように言ってもらいたいわ」

「要するに、ここは執筆する場所だと言っているガキが。早くここから出ていけ」  
アンデルセン。

少女の言葉から何気に出されたその名は、世界で知らぬものなど居ないと言われるほど有名な『世界三大童話作家』の作者の一人の名だった。

「この前、ぱそこん？ っていう機械があつたじゃない？ あれでアンデルセンって名前を検索したらあなたが出てきたのよ！ すごいのだわすごいのだわ！ あなたとてもかっこいいおじさまだったのね♪」

「誰だ、一緒に検索したのは？ プライバシー侵害だ訴えている。…チツ、今の時代に法律などないか、人類衰退ゆえの無法世帯とは泣けるな」

「えーと？ 1805年4月2日生まれなのね、あなた」

「現在進行形でズカズカと侵害しているな貴様。おい、俺のタブレット返せ！」

「いやなのだよ」

「アリス！」

アリス。ことからも聞いたことのある名であるが、見当するもなど沢山あり過ぎるのだが、アリスと呼ばれた少女は無垢な少女のようにニコニコと輝くように笑い、黒い可愛らしいドレスを揺らして、疲労気味のアンデルセンから華麗に避けていった。

「なんだかとても遅いわ、アンデルセン」

「ぐぐぐ……長時間椅子に座り、物書きに集中し過ぎで腰が……」

「あはははは！　まるでおじいちゃんみたい♪」

真つ白な髪を揺らして、コロコロと笑う少女に、大抵の男なら和むというのに、このアンデルセンは違った。

「プカプカ浮かぶ本がなにを言うか」

「デンマーク語発言じゃあ、あなたはハンス・クレステヤン・アナスンだったのね」

「だから読むな。読むなら本人の目の前じゃないところでやれ」

「……………」

「黙読もするな！　ええい！　ほっ！　よし取った！」

「あ〜ん！」

浮かぶ少女から最新機具であろうタブレットを返してもらったアンデルセンは深いため息と共にアリスを見た。

「そんなに暇ならあの切り裂き小娘や、年中サンタ服姿のお仲間になった愉快的な聖女小娘と遊んでいればいいだろう。俺は暇ではないのだよ」

「ジャックはライオンおじさまと何かお手伝いしていたわ。ジャンヌなら大きな白と黒のジャンヌと何か騒いでいたわ」

「そうか、それで友達が少ないお前は俺の所にきたのか」

「む、むう！　そ、そんなことないかしら？」

「ほおう〜？　そうか。しかしそれでは随分と寂しそうにして俺にかまってきたな」

「そこでね、なにか面白いものを探しにいきたいから、あたしの冒険にあなたもついてくることを許してあげたのよ」

「なんだ、話を通じなくなっただかこのガキ」

アンデルセンは無視を決め込む為に、ヘッドフォンを装着する。最新のヘッドフォンはよく出来ている。外の音がまったく聞こえなくなるのだから。

しかし、アリスも負けてなどいなかった。

ヒョツイつとアンデルセンがつけたヘッドフォンをずらし、彼の耳元に口を近づけさせた。このアクションにアンデルセンはすぐに子供特有の情け容赦ない大声が襲いか



かってくることを安易に予測でき、覚悟を決めて待っている、やってきたのは大声な  
んかではなく。

「ふう〜」

「おつふお……」

この文章にも表現しにくい現象がアンデルセンに襲いかかり、意識を刈り取られそうになる。幼女に耳ふうくをやられて項垂れてしまった世界三大作家の一人、アンデルセン。見た目が子供なのでイケナイ遊びに見えなかったが、これは本人が一番きついでらう。

しかし、

「なんだこれは癖になるな！ もう一回ふうくやってくれ!!」

「さあ、行きましよう！ 楽しい冒険の始まりなのだわ！」

か弱いアリスだというのに、アンデルセンは腕を引かれて連れて行かれる。

かつて感じたことない感覚にインスピレーションを刺激されたアンデルセンは、手に持ったお手軽ノートに何かを書き込みながら、ついていくのだった。

実在の人物を英霊としたものではなく、絵本のジャンルの『ナーサリー・ライムわらべうた』。

子供たちに深く愛され、多くの子供たちの夢を受け止めていったこのジャンルは、一つの概念として成立、「子供たちの英雄」としてサーヴァントとなったアリス。

そんなアリスと共に、  
童話作家アンデルセンがついていき、  
架空の遊びをしていくお  
話し。

# まずは手始めに

「それで、一体何をしたいというんだ」

「冒険よー!」

「それはさつき聞いた」

長い廊下を歩きながら、青髪波声の童話作家、アンデルセンは今現在でも納得をいかない顔で無邪気にはしやぐ絵ナーサリーライム本に鋭い視線を向ける。

「バカめ。目的が無ければ意味がないだろう。起承転結をしつかりしろ。そうじゃない4コマなど誰も読んでくれないだろうさ」

「世界のあらゆる冒険を試してみたいのよ!」

「………んん? それは………」

ナーサリー・ライムは絵本を読んだ子供たちが願った英雄。子供たちの英雄。この可愛らしい女の子の姿も大切なマスターを鏡写しをして模かたどってるに過ぎない。だが、現実としてそこいる。

いま現在も考え込んでいたアンデルセンの頬を引つ張っていた。

「……おい、引つ叩かれたいか？」

「あははは！ 歩くのが遅いからよ、さあ、早く早く」

ナーサリーに手を引かれていくアンデルセンだったが、これもこれでアンデルセン的に執筆作業の手助けになるかもしれないものと考えると強く言えないでいた。

と、そこにさっそく困っていたアンデルセンに救いの手が見えた。

「やあマスター！ 奇遇だな！」

「う、うわあ！ 嫌な予感しかしない笑顔！ け……けど、やあアンデルセン！ ニコニコ笑顔でナーサリーを全面に押し出して俺を逃がさないようにするのはズルイなあ！」

黒い髪を揺らして、様々な英霊たちのマスターになった異例の中の異例のマスターにして、ここカルデアでの常識人である藤丸立香が微妙な微笑みを浮かばせてやってくる。そして、大抵は愉悦の対象となってしまう。

「嫌な紹介されたような気がする！」

「メタな発言は止してもらおう。それよりマスター。ちよつといいか？」

「ダメなら？」

「じゃあ話すぞ」

「なるほどね。関係ないんだね！」

藤丸はアンデルセンから話を聞くと、ナーサリーと向き合う。

「ごめんよナーサリー……。俺があまりナーサリーを編成に入れないで冒険してたばかりに……」レイシフト

「ちよつと違和感を覚える言い方だが、そうだな。ここはマスターにも協力してもらおうじゃないか」

その提案にナーサリーは笑顔が更に咲き乱れた。

「マスターも遊んでくれるのね！ 嬉しいのだわ嬉しいのだわ♪ お仲間が増えたわ」

そして、アンデルセンと藤丸はナーサリーがしたい冒険が何か聞くことにする為、休憩スペースに向かおうとするも、そこに行くまでに既に何人も世界的有名な者たちが付いてきてしまう。

「黒髭は来なくて良かったと思うんだ」

「冷静に酷いですぞマスター！ グフフフしかしこればかりは可愛い……ゲフン！

おもしろ……ゲフンゲフン！ 小さな女の子のお遊びに付き合わねば大海賊としての名折れ！ 拙者これでも子供好き！」

「その通り!! 子供とは清純な生き物！ 神に愛された子羊なのです！ 穢れ無き純白なその柔肌は如何ほどのものか！」

「違うからね?!?」  
「そっちの青髭さんはこの黒髭さんよりだいぶ真つ黒ですからな!!」

エドワード・ティーチ。黒髭の異名を持ち、世界で最も有名な海賊。海賊というイメージを決定付けた大悪党。

異名の由来となった豊かに蓄えられた髭には、ところどころに導火線が編み込まれ、爛々と光る眼はまさに地獄の女神とも悪魔の化身と恐れた。その残虐さで人類史に刻まれた彼も、サーヴァントとして現界すれば、一体どうやってそんな知識を知ったのか、気づけばオタクとなって楽しんでる。

そして、もう片方はジル・ド・レエ。十五世紀の人物で、フランスのブルターニュ地方ナントに生まれた貴族にして軍人。かの童話『青髭』のモデルとなった人物。誰よりも神を求めた「聖なる怪物」。

しかしながら、そういった暗い過去を持つ二人であるが、ここカルデアにきてからそういう凶悪性やはどこかに霧散したように悪行などすることなく過ごしているが、逆にかなり残念な感じになってしまっている。

「どうしてよりにもよってこの二人が付いてきた!」

「悪役にびったりでしょ!」

「もう悪役とか配役がある設定なのか!」

「ナーサリーとさつきある程度話してたからね!」

サムズアップする藤丸にアンデルセンは頭を抱える。なんやかんや言ってこのマス

ターはノリノリである。

「大丈夫！ アタランテ呼んでるから」

「既にダブルヒゲオヤジ共に矢を番えて構えているあの野獣娘か？」

「ストツオプ!! ストツプだよアタランテ！」

アタランテ。ギリシヤ神話に登場する狩猟と純潔の女神アルテミスの加護を授かって生まれた「純潔の狩人」。子供の為なら喜んで捨石になるほどの子供好き。というわけで、実は黒髭や青髭を陰ながら殺そうと謀っていたりしていた。特にジル（術）を。

「ぐぐぐぐははは……コイツと私を引き合わせるとは中々なチョイスではないか。うむ。任せろ……無惨に殺してやろう」

「じゃあアタランテはヒーロー役ということでもいいな。うむ、もつと配役が欲しいところだ」

「あれれ?!? 助ける場面じゃない、だと!! ひい! 待つでござる待つでござる!

拙者、子供大好きですぞ! ほらほら有名な大人気漫画では知らぬ者など言わぬあのゴムな船長の海賊漫画とかあるから、拙者子供の憧れの的ですよ! 悪魔の実だつて食べちゃう!」

「柔らかい果実……なるほど、確かに子供は柔らかいですなあ」

「コイツ! コイツが主犯! 拙者無実なりい!」

騒ぐ黒髭と何故か一人冷静に何かを思い出している鬼畜ジルに矢を放とうとしているアタランテたちに、また新たな人物が現れる。

「子供好きと聞いてやってきた正義のヒーロー！ 坂田金時ここに参上だぜえ！」

「またも暴走をしているのですかジル！ 待っていなさい、いつもの目潰しを二割増しにしたこの指が貴方の怒りを抑え込みます！ 主よ、私に力を」

やってくるやってくる英霊の巣窟カルデア。

妙にハイテンションでやってきた坂田金時に、親愛なる友にして理解者であるジルの暴走を止めるべく現れた聖女ジャンヌ・ダルク。

あれこれとアンデルセンと藤丸はカオスになっていく中、着々と配役が決まってく。

「よし！ まあ、居る奴らで構わないか」

「まあ、アンデルセン。なにかお話を作ってくれたの!？」

「そんなバカな、即興で創作物うを作ってみろ。結果は同じだ。最悪なものになるぞ！」

しかしそれが面白いものにも変わるかもしれない。数年後に「

うふふふ！ とても楽しみなのだわ！」

「足りない配役は随時補充していけばいいだろう。さあやるぞ、起承転結があるのかなのか、ぐだぐだな作り話を」



嫌な予感しかないのは、別に藤丸だけではなかった。

※

ナーサリー・ライムは冒険の話を知りたいと言っていたので、とりあえず冒険ものにしてしようと書き始めたその話は、小さな少女<sup>アリス</sup>が夢の中で不思議な旅行をするものだった。

「ふわああ。眠いのだわ眠いのだわお兄様」

「そうかい？ 眠いのならほら、ゆっくりと眠りなさい。アリスの側には僕がいるよ」

アリス役のナーサリーはお兄様役の藤丸立香は眠そうにしているナーサリーを眠りにつかせる。きつといい夢が見れると思うから、お兄様役藤丸立香は優しくアリス役ナーサリーの頭を撫でる。

（あれ？ 寝息？ 本当に眠っちゃった？）

しかしこれでOK。

場面は変わり、眠りについたアリスは、とても愉快な夢を見ていた。

「すごいのだわ！ お菓子の木やお菓子の地面よ！ お菓子の国だわ！」

アリスが立っているのふわふわなチョコのスポンジケーキの地面、クッキーで出来た木や岩があった。まさしくそれはお菓子の国。子供が喜びそうなものばかり。しかし、大人になってしまった者たちからしたらこれだけ甘いものばかりだと胃が痛くなる想像しかできないのが悲しい。

そんなことなど露知らず、アリスはそのお菓子の世界に魅了されていた。

そんなアリスに一つの影が近付いた。

「や、やあその可愛らしい少女。ここはお菓子と夢が詰まった幸せの世界。き、君をずっと待っていたのさ！」

兎の耳を付けたアタランテがそこ居た。

そして、喋る事に赤面する彼女は生まれてからこんな演技をすることに思わなかったことだろう。

ギリシャの英雄にさせることではない。だがしかし、とうの本人は幼き子供の願いならこんなこと喜んでやるのがアタランテという英雄であった。

なぜ兎の配役なのかはアンデルセンが決めているので分からない。

(そ、そもそも既に獣耳がある私に兎の耳まで付させるなんてまったく！ あのアンデ

ルセンという奴は見た目こそ子供だが中身はダメな大人の匂いしかせん！　ぐうう！  
しかし……）

純真なアリスの瞳がタランテを見ている。

アタランテは綺麗な金髪だが無造作にされていて、それが意味野性味溢れていて  
良い風格を表している。

「さ、さあ、アリス！　こちらに」

アリスに手を伸ばす白ウサギの配役であるアタランテは、しっかりと手をつかんだ。

「とてもキレイなウサギさんね。でも、白というより、金色のウサギさんだわ」

「こ、細かいことは気にするな……ゴ、ゴホン。さて、では案内しよう。このお菓子の世  
界を……」

ここから先は、カルデアを初めとした、童話作家アンデルセンが手掛けた楽しい創作  
物語。

いったいどんな登場人物キャラクターたちが出てくるのか、予測できない。